

#### 42 当科における sorafenib 治療の検討

長島 藍子・須田 剛士・倉岡 直亮  
 鱒 陽介・山本 幹・横山 純二  
 五十嵐正人・川合 弘一・山際 訓  
 青柳 豊・松田 康伸\*・大越 省吾\*\*  
 小林 真\*\*\*

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
 消化器内科学分野  
 新潟大学医学部  
 保健学科・検査技術科学専攻\*  
 昭和大学横浜市北部病院  
 消化器センター\*\*  
 豊栄病院内科\*\*\*

Sorafenib は病勢制御を目的として使用されるが、中には奏功する例も存在する。当科では4年間で25例に導入し、3例が奏功した。AFP、PIVKA II の低下や画像的に腫瘍縮小を認め、いずれも導入から1ヶ月程度で奏功判定が可能であった。

25例中1ヶ月未満で中止した不耐群と1ヶ月以上継続できた継続群を比較すると、不耐因子として、性別と身長で有意差を認め、女性と低身長が副作用出現のリスクファクターといえた。

継続群で自己中断例、現在も生存し内服継続例を除いた15例で、内服終了後からの生存期間の中央値で2群に分け、短期群と長期群とで比較したところ、AFPとL3分画で有意差を認めた。長期群では導入前のAFP、L3分画が短期群と比して低値であった。そこで、不耐群と継続群をAFP、L3分画の中央値でそれぞれ2群に分けて、4群比較をした。AFP、L3分画が低値で生存期間は長く、さらに内服継続できた群に長期予後が見込める傾向があったが、今後も症例数を重ねて検討する必要がある。

#### 43 SPIO - MRI を用いた RFA の治療効果判定

阿部 聡司・佐藤 聡史・田川 学  
 若林 博人・松永 賢一\*・間島 一浩\*

竹田綜合病院消化器内科  
 同 放射線科\*

#### 44 音響放射圧を用いた肝内せん断弾性波速度測定による肝細胞癌発癌リスク評価

高村 昌昭・須田 剛士・兼藤 努  
 吉川 成一・上村 颯也・田村 康  
 五十嵐正人・川合 弘一・山際 訓  
 野本 実・青柳 豊・松田 康伸\*

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
 消化器内科学分野  
 新潟大学医学部  
 保健学科・検査技術科学専攻\*

【目的】慢性肝疾患患者において、肝線維化の評価は肝細胞癌(HCC)発癌リスクを考える上で非常に重要である。今回我々は音響放射圧を用いた肝内せん断弾性波速度(SWV)測定による非アルコール性脂肪性肝疾患(NAFLD)症例におけるHCC発癌リスク評価の有用性について検討した。

【方法】対象は2010年11月から2012年5月まで当院にて肝内SWV測定を行ったNAFLD 136例(男性66例、女性70例、平均年齢54.4±19.4歳、非アルコール性脂肪性肝炎82例)で、うちHCC症例は9例であった。測定機器はSiemens社のACUSON S2000を使用し、12回(各区域3回)の平均SWVを求めた。またHCC発癌リスク評価については、肝内SWV測定時の各種血液検査値を加え、ROC分析とロジスティック回帰分析にて解析を行った。

【結果】平均SWVは非担癌症例(1.68±0.71 m/s)に比し担癌症例(3.18±0.41 m/s)で有意に高値であった(p<0.001)。ロジスティック回帰分析では、平均SWVと血小板数がHCCの独立危険因子であった。担癌症例を識別するためのROC曲線下面積は、平均SWVで0.940とFib-4 index(0.939)、NAFLD fibrosis score(0.938)と同等で、AP index(0.904)、APRI(0.852)、BARD(0.857)よりも優れた結果であった。

【結語】音響放射圧を用いた肝内SWV測定は、NAFLD症例におけるHCC発癌リスク評価に有用である可能性が示唆された。